
ロウきゅーぶ! Team of another 1st Capter 鳥ノ宮小女バス編

虹人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウキゅーぶ！ Team of another 1st Chapter 鳥ノ宮小女バス編

【Nコード】

N0304Z

【作者名】

虹人

【あらすじ】

とある事情で鳥ノ宮小学校の女子バスケット部と合同練習をすることになった慧心学園の女子バスケット部と昴。

鳥ノ宮のバスケット部員やそのコーチとともに新たな日常が始まる！

ギャグにシリアス、ラブコメにスポコン、バトルあり（！？）のロリング・スポーツコメディ、ここに開幕！

注：オリ主はややチートです。また作者に文才はありません

はじめに（注意書き）

注意書き（必読）

この作品は口ウきゅーぶ！の二次創作です。

お読みになる前にいくつかの注意点があるので、以下の内容に不快感を示す方は読むことをオススメしません。

1：作者はここに投稿することすら始めての初心者&ド素人です。文章の内容や設定ミスが多々あるかと思えます

2：この作品にはもうひとつのバスケットチームを登場させるため、オリキャラが多数登場します。

オリ主が昴と同じくバスケットのコーチをし、教え子のチームメイトも全員オリキャラになります。

3：この作品のオリ主はかなりチートです

（ただしオリ主は片腕の故障によりチートっぷりをフルに発揮することはあまり無いかと思えます）

それ、チートの意味あるのか？と言われればそれまでなのですが、ストーリー上の演出みたいなものと考えていただければ・・・

4：この作品は原作7巻まではほぼ原作通りという設定です。

よって時系列的には8巻の途中からのスタートということになります。

またストーリーはほとんどオリジナル展開になってしまってます。

その影響で一部の原作の話の時系列にズレが生じてます。

構想が9巻までの時点で出来ているため、10巻以降の話とは食い違う点が出てくるかもしれません。

ご了承ください。

すでに大まかな話はできているので訂正は難しいです。

5 原作 8 巻に登場したミミーですが、登場の予定は残念ながらありません

(出してしまうと 5 年女バスとの絡みが増え、ストーリーが長くなってしまうので)

どうしても出して欲しい、という意見が多い場合、別の機会が登場させるかもしれません。

6 : この作品はギャグ、ラブコメ、シリアス、バスケなど様々な要素を詰め込んでます。

その影響で一部のキャラが崩壊してたり

不遇な扱いになったりするかもしれません。

お気に入りのキャラがそうだった場合、直ちに見るのを中止することを推奨します。

また、バスケの知識はスラムダンクと wikipedia でかじった程度なので

バスケパートに関してはおかしい点が出てくるかもしれませんし、

話の都合上キングダムオブザゴッドズすることもありますが。あらかじめご了承ください。

7 : この作品にはパロネタが多数出てきます。

原作でもこういうパロネタはあったので大丈夫かもしれませんが、念のため。

8 : この作品には 15 歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現が含まれています、

もしかしたらもっと過激な表現があるかもしれませんが (そんなことは無い様に気をつけてはいますが) 。

また 1 部の話ですが残酷な描写と思われるもの (グロテスクなものではないですが) があります。

少しでもだめな方、苦手な方は読まないことをオススメします。

9：ミニバスの公式戦は10人以上いないと参加できませんが、この作品では6人以上で参加できる設定になってます。
10人もキャラ用意できないって！！そんなにキャラ出したら收拾つかなくなるから！！

10：最後に。この作品は昴×智花のカップリングを応援しています。

「昴×葵だろ！」な人には絶対にオススメできません。

長くなりましたが、ようは作者の妄想のままに書きまくってるというところですよ。

ひどい出来だと思えますがそれでも面白いと思っていただけたら幸いです。

プロローグ

「合同練習？」

それは長谷川昂の父親、銀河が帰ってきた後のことだった。

篁美星は昂と銀河に挨拶がしたいとやってきた湊智花に鳥ノ宮小との合同練習のことを話した。

「そ。その鳥ノ宮小学校なんだけどね、体育館の老朽化が激しくて今立て直してるところらしくて。

しばらく体育館が使えないからバスケの練習とかもできないですよ？」

そこで慧心の女バスと合同でいいから練習に参加させてもらえないかって話になった訳。」

「でもそんなに大勢でこられたら練習するスペースがないんじゃないか？」

「あー、その辺はなるべくこちら側に迷惑かけない範囲で練習するって言ってたし、

それに向こうの人数は7人ぐらいだからそれほど窮屈にはならないと思うよ。」

硯谷学園の女バス並みの人数なら大変なことになるのではと心配したがそれほど大人数のチームではないらしい。慧心トウシンよりは少し多いが。

「ところで鳥ノ宮小の女バスってどんなチームなんですか？」

智花が美星に尋ねる。昂も鳥ノ宮小のことはあまり知らなかったためどんなチームなのか興味があった。

「うーん、一言で言うなら万年弱小校、だね。創立時からずっと毎年初戦敗退の歴史があるってさ」

はつきり言うなよ・・・と昂は心の中でツツコミを入れる。

「ただ」

「ただ？」

「今年の6年の女バスは別格だつて噂だよ。何でも結構凄いバスケットが上手いコーチが教えてるとかで。」

確か歳は・・・昴、あんたと同じくらいだったかな？」

「俺と同じ年くらいって・・・高校生なのか？」

「まあそういうことになるねー。どこの学校だったか忘れたけど。にやははー。」

まあ明後日の合同練習のときに会えるわけだしそんな時にわかるでしよ。」

なるほど。そのコーチが鳥ノ宮の女バスにバスケットを教えるということは当然合同練習にも来る、ということか。

「ま、そういうわけだからさ、2週間ほどで向こうの体育館の改築が終わると思うから」

それまでは2人とも向こうとも仲良くやってね。」

そう言つと美星は部屋を出て行つた

俺は今、智花と一緒に買い物に出かけている。

母さんが夕飯の食材が足りなかつたため俺にお使いを頼んだら、智花も一緒に行くと言い出したのだ。

「悪かつたね、智花。母さんのお使いにつき合わせたりなんかしちゃつて。」

「いえっ！そんなこと無いですっ！一緒に行くつて言ったのは私のほうですし・・・」

そんなことを話しているときだった。

後ろからバイクが俺の右側をすれ違つたと思つたら、買い物袋を奪われていた。

「ひ、引つたくりだ！」

慌てて後を追おうとしたが相手はバイクだ。とてもじゃないが追いつけるものじゃない。

そんな時、引ったくりが向かっている先に一人・・・俺と同じ高校生ぐらいの男が歩いてきた。

引ったくりは男の左脇を素通りしようとした、次の瞬間、ひったくりの左手には盗んだ荷物は無く、男の左手にその荷物が存在していた。

引ったくりは突然の出来事にパニックになり、あわててその場から逃げ去っていった。

「ほら、あんたのだよな？」

男は盗まれた荷物を俺に差し出した。どうやら事情を察して取り返してくれたらしい。

だが俺は別のことが気になっていったため、それに気がつかなかった。

「・・・？ 昴さん？ どうかしましたか？」

「あ・・・いや、なんでもない。」

智花に声をかけられ、慌てて男から荷物を受け取る。

「ありがとう。本当に助かったよ。」

「気にすんなって。それよりあの引ったくりだけ一応警察に通報したほうがいいかもな。相手のバイクのナンバーは誰か覚えてるか？」

「あつ、それなら私が覚えてますっ！」

智花が手を上げ返事をする。

「そっか、それなら悪いけど後は任せてもいいか？」

「急いで家に帰らねーといけないんでな。」

「あ、ああ。別にいいけど・・・」

俺が言い終わる前に男はその場から立ち去っていた。

「あ・・・行っちゃいましたね・・・」

「ああ・・・仕方ない、俺たちも行こうか？」

「はいっ！」

そうして智花と歩き出す中、俺はひとつあの男のあることが気にな
っていた・・・

あの時の引つたくりから荷物を取り返すときの動き・・・
バスケのスタイルに似ていた気がしたけど・・・バスケ選手？ま
さか、な・・・

（それにしてもあの二人・・・兄妹かと思ったが違うみたいだな・・・
・昴さんって呼んでたし、たぶん恋人つてとこか・・・？）

兄のことを名前で呼ぶ妹もいるだろうがそれならばさん付けをする
なんて事はまず無いだろう。

身長差があるのは気になったが、彼女はちょっと背の伸びが遅い高
校生または中学生なんだろう、と納得した。

（つと・・・大分時間食っちゃったな・・・そろそろか帰らねーと
アイツが心配するか・・・

明後日から慧心との合同練習も始まるわけだしな）

そう呟きながら鳥ノ宮小女バスのコーチ、神崎風馬かんざきふうまは帰路に着いた・

・

第一話 鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部（前書き）

お待たせしました。ようやく第一話です

第一話 鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部

交換日記 (SNS) Log Date 9月4日

『いよいよ明日だな、ごーどーれんしゅー!』まほまほ

『おー、ひなも鳥ノ宮のみんなとバスケットするの、たのしみ。』ひなた

『そういえば鳥ノ宮小のコーチも一緒に来るんだよね…怖い人じゃないといいけど…』あいら

『大丈夫だよ愛莉。美星先生の話だと皆から懐かれてるって話だし、

悪い人じゃないと思うよ!』湊 智花

『そっかー。とりのみやのコーチもくるんならまたアレのじゅんびしねーとなっ!』まほまほ

『ちよ、ちよつと真帆!まさか向こうのコーチの人にまでアレをやるつもりなの!?!』紗季

『あたりまえだ!ダイイチインショーってのはだいじなんだぞ!』まほまほ

『そ、それはそうだけど…』紗季

『おー。ひなはやりたい。』ひなた

『な、なんかまた大変なことになりそう…。』あいら

『そ、そうだね…。』湊 智花

9月5日

慧心学園校門前

さて、どうしたものか・・・

風馬は悩んでいた。

何せここは慧心学園。今まで来ていた鳥ノ宮小とはいろんな意味で勝手が違うのだ。

そうこうしていると後ろから急に誰かに声をかけられた。

「あれ、あなたはこの間の・・・」

振り向くと、そこには一昨日引ったくりの被害にあった男、長谷川 昂がいた。

「なるほど、あんたが慧心^{こころ}学園のバスケット部のコーチをしてるわけか…
ああ、そういやまだ名前言ってなかったな。俺は神崎だ。よろしくな！」

「俺は長谷川昂って言います。まさか神崎さんが鳥ノ宮のコーチだったとは思いませんでした。」

「俺のことは神崎でいいぞ。あと年もあまり変わらないみたいだしタメ口でいい。」

「わかった、神崎。」

それから二人は体育館に向かう間、軽く世間話をしているうちにすっかり意気投合していた。

「そういえば神崎、鳥ノ宮の女バスの子達は？」

「うーん…まだ来てないみてーだな…先に入って待ってるか」

「いいのか？待ってなくて。」

「警備員の人に一通り説明してあるし、大丈夫だろ。」

ところで長谷川、慧心女バス《そっち》の子達で何か気をつけたほうがいい事とかあるか？

おかしい事言っただけ心象悪くするのも拙いしさ。」

体育館前まで来た風馬が扉へ向かいながら昂に尋ねる。

「気をつけたほうがいいこと……あつ！そうだ！」

体育館の扉に手をかけようとしたとき、突然昴が声をかけてきた。

「部員の中に一人背の高い女の子がいるんだけど、

その子高身長コンプレックスで背のこと凄く気にしてて、

だからあまり背のことには触れないであげて欲しいんだ。」

万里や葵のおかげで大分コンプレックスも克服できてはいるが、愛莉は繊細な子だ。

初対面の子にからかわれて元の木阿弥に、なんてことになっては洒落にならない。

念のために気をつけるように言っておく。

「わかった。あいつ等にもメールしておくよ。後で皆が知らずに変な事言ったりしたら大変だしな。」

そういうと風馬は携帯でメールを送った。

そして改めて体育館の扉に手をかけ

「おかえrボタン！」

風馬が扉を開け、1秒ほどで体育館の扉が閉じられた。

その様子を見て昴は風馬が何を見たのか大体察した。

神崎は多分皆のメイド服姿か何かで出迎えられたんだろう。

最初は戸惑うよなあー。俺もそうだったし……。

「長谷川……」

「いや、誰だつてあんなの見せられたら最初は動揺するさ。――（神崎の場合異常だったけど）

とりあえずあの子たちにはきちんとおいておいたから、もう大丈夫だと思つぞ。」

風馬がある程度落ち着いた後、昴は体育館に入り真帆たちに着替えるように言っておいた。

これでさっきの様な騒動になることは無いだろう。

「じゃあ改めて入りますか。」

風馬が再び扉を開け、二人は中に入った。

「え、えーつと…こ、こんにちは…」

さっきの事があつたため風馬の挨拶が大分弱々しい。

それが余計に気まずさを増していた。

みんなのほうもさっきの事があつたせいか少しづつが悪そうな顔をしていた。

そんな空気を何とかするため昴が口を開いた。

「き、今日から合同練習があるわけだけどこちらの方が鳥ノ宮小でコーチをしてる神崎って人だ。」

少し調子が戻ってきた風馬が自己紹介を始めた。

「みんな、さっきは取り乱してすまなかつた。俺は神崎。鳥ノ宮の女バスのコーチをしてる。」

「あ、私は永塚紗季です。こちらこそ先ほどはすみませんでした、バカ真帆のせいで…。」

「なっ！あたし一人のせいみたいにゆるなっ！っと、あたしは三沢真帆！よろしくなっ！ザツキー！」

「ぎ、ぎっキー…？」

妙な呼ばれ方をされて少し戸惑う風馬。

「うん。かんざきだからザツキー。」

「ま、まあいいけど…」

そう言うと風馬は他のメンバーへ視線を移した。

「おー。ひなは袴田ひなたっていいいます。」

「あ、えっと、私は香椎愛莉です。よろしくお願いしますっ。」

それぞれが自己紹介する中、風馬は見覚えのある少女に気付く。

「あれ、あんたは確か一昨日長谷川と一緒にいた…恋人？」

「こ、こい！？ふ、ふええええええええええええええええつ！？」

昴の恋人と思われていたことに恥ずかしさで顔を真っ赤にする智花。

「おおっ！ザツキーよくわかったな！」

「ぷっ、くっ…あはははははははっ！なんかいいな、それ！
気に入った！その呼び方でかまわない。」

風馬はその呼び方を気に入ったようだ。
そうこうしている内に智花のほうも大分落ち着いてきた。

「そういえばいろいろゴタゴタがあったからまだ彼女の名前聞いて
なかったな。」

「あ、そういえばそうでしたね。私は湊智花です。よろしく願
います。」

「そして長谷川さんの恋人でs「もぉーっ！紗季っ！」

またからかおうとした紗季に対して顔を真っ赤にしながら怒る智花
であった。

「ところで神崎さん、さっき智花ちゃんと長谷川さんが恋人だっ
て思ってたみたいですけど

兄妹に見えた、とかは思わなかったんですか？」

愛莉が風馬に尋ねてみた。

「まあ…兄妹とは思えなかったし。最初は中学生くらいかな、とは
思ってたけどな。」

小学生だったのにはちょっと驚いたが風馬にとってはそれほど気
になることではなかった。

「まったく、お前はどこでも相変わらずだな…。紹介する。こいつが鳥ノ宮小女バスのメンバーの一人で俺の妹の神崎雷華だ。」

「……………いつ、妹お!?」「……………」

昴と慧心女バスメンバーは驚きの声を上げた。

「そんなに驚くことか?」

「いや…あんまり似てなかったから…」

昴の言うとおり、二人の外見はあまり似ていない。同じなのは髪の色がライトグリーンなところぐらいだろう。

「それより雷華、他のみんなも来てるんだろ? みんなも呼んでやってくれないか? 自己紹介もしないといけないしな。」

「あつ、うん! みんなー! 入ってきていいよー! ツ!」

雷華が大声で呼ぶと他の女の子たちが次々と入ってきた。

一人目は黒髪で三つ編みの少女で背はひなたより少し高い程度の女の子だった。

「えとえと、植月麻衣菜うえつき まいなって言います。

ポジションはPG (ポイントガード) です。よろしくお願いします。」

二人目は茶髪でロングヘアの少女。

「ウチは西山にしやまこのは。

ポジションはSF（スモールフォワード）や。みんな仲良うしてなー。」

三人目は麻衣菜と同じく黒髪で少しクール…というか寡黙な雰囲気
のする少女だった。

「…倉石くわいし光。

ポジションは同じくSF（スモールフォワード）。…よろしく。」

そして四人目と五人目。紫色の髪で、片方はショートヘアーのツイ
ンテール、

もう片方はセミロングの少女だ。

「双代ふたしろ亜矢あやです。」

ポジションはSG（シューティングガード）です。よろしくお願
いしますです。」

「亜矢の双子の妹の双代ふたしろ沙矢さやなの。」

ポジションは亜矢と同じくSG（シューティングガード）なの。
よろしくお願いたしますのー。」

最後に雷華が自己紹介することになった。

「じゃあ改めて自己紹介するねツ。神崎雷華、

ポジションはPF（パワーフォワード）！そんで風兄の妹ですツ！

あたしのは雷華って呼び捨てでよんでいいから。みんな、よ
ろしくツ！」

その後、智花達も鳥ノ宮の女バスメンバーに自己紹介を済ませたの
だが

「あれ？おい雷華、空条はどうした？一緒に来てないのか？」

風馬が一人足りないことに気付き、雷華に尋ねる。

「うん。ちょっとバスに乗り遅れちゃったみたいで。でももうすぐ来ると思うよー。」

「くっ……じょう……？」

智花が風馬の出した名前に反応する。しかしそれに気付く者はいなかった。

それから数分後

「すみません！遅くなりました！」

体育館の扉を開け、最後の一人と思われる少女が入ってきた。炎のように真っ赤な髪で、身長は愛莉ほどではないがかなり高いほうだ。

「空条飛鳥こいじりです！ポジションはセン……タ……」

少女　飛鳥の言葉が途中で止まった。その視線は智花のほうに向けられていた。

「え……？ともか……？」

「あ……あす……か……？」

戸惑いを隠せない飛鳥。智花はどこか怯えているようにも見えた。その様子に気づいたのか、飛鳥は

「あのッ！神崎さん！せつかく来たのに悪いんですけどちょっと具合が悪いんで今日は早退しますね！」

「あッ！おいッ！！飛鳥！！」

返事を聞く前に逃げるように体育館を出て行く飛鳥。そして

「あ……す……か……」

智花は意識を失った……

「智花！？智花！！！しっかりしろ！智花ああああっ！！！」

第一話 鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部（後書き）

虹人「どうも初めまして、虹人です。」

雷華「初めましてー。雷華でーす（楽屋裏ver）。」

虹人「しかし連載一話目からシリアス展開突入になるとは…」

雷華「自分で書いといて何言ってるの!?!」

虹人「いやホントマジでどうしてこうなったのかわかんない。

本来はギャグを展開しつつ

智花と昴のニヤニヤ展開したりするはずだったのに…」

雷華「それならあたしと風兄のラブラブ展開も書いてよ!!」

虹人「これ読んでる人が近親相姦を望むなら考えておきます。」

雷華「人任せ!?!」

虹人「それではまた次回!

感想とかあればご自由にどうぞ。」

第二話 智花と飛鳥（前書き）

遅くなつてすみませんでした。第二話です。

第二話 智花と飛鳥

「空条飛鳥…間違いないね、前の学校で智花と同級生だ。」

彼女は元はバレー部だったけど素行不良が原因で辞めてるみたいだね。

迂闊だったよ…まさかこんな形で智花と鉢合わせることになるなんて……」

あの後智花は保健室に運ばれた。

母親に連絡してあるので、しばらくすれば迎えに来るだろう。

その間に昴たちは美星先生に飛鳥のことについて調べてもらった。

「もっかんの前の学校の同級生……ってことはあいつ、前の学校でもっかんのこと苛めてた奴らの仲間だったのか！」

真帆が怒りをあらわにする。真帆は智花の過去のことを知っている。だからこそ智花の前の学校に対してあまり良い印象を抱いていないが、

「飛鳥はそんなことしないよッ!！」

突然大声を出して反論したのは雷華だった。

「飛鳥は、そんなことしないよ……。一緒にいたからわかるもん…」

飛鳥はそんなことするような子じゃないって……」

「わたしも…彼女を信じます。最初は怖くてとっつきにくいところ

もあつたけど

あの子は理由も無く人を傷つけたりするような子じゃありません。信じて……くれませんか？」

雷華に続くように麻衣菜も彼女を弁護する。

それに同調するようにこのは・亜矢・沙矢・光も頷く。

「そうだな……俺も空条がそんな人間だとは思っていない。

だがもし空条がお前の思っているような人間だったのなら　それは全て彼女をバスケ部に引き入れた俺の責任だ。

だからその時は　俺を煮るなり焼くなり好きにすればいい。」

「ちよつと！風兄ツ！！」

風馬の発言に慌てて止めようとする雷華だったが

「雷華、このくらいの覚悟はしないと彼女達は納得しないさ。大丈夫だ。空条を信じてるんだろ？」

「……………うん」

「これが俺達の答えだ。これで勘弁してくれるか？」

「うー……………みんながそこまで言うなら……………」

まだ少し釈然としない様子の真帆だったが、何とか納得してくれたようだった。

その後、バスが来る時間がきてしまい、今日は練習することができなかつた。

「長谷川、ちょっといいか？空条のことなんだが…」

智花の母親・花織さんが迎えに来た後、風馬が昴に話しかけてきた。

「空条……飛鳥ちゃんのこと？」

「ああ。あの後少し考えたんだが、俺は湊のことは何も知らない。

だがおまえは彼女の過去のことについてわかっている…そうだな？」

「ああ…でもそれがどうかしたのか？」

「湊と空条の間に何かあったのならそれはきっと前の学校で何かあったんだろう。」

だが俺は空条からは何も聞いていないし聞こうとは思わなかった。だからアンタに頼みたい。湊のことをキチンとわかっているアンタなら空条もきつと話してくれるはずだ。」

「わかった…でもどうやって彼女に会うんだ？」

いきなり彼女の家に押しかけられるのもおかしい気がするし、かといってあんなことがあった以上部活動のときに話が出来るとは思えない。

それどころか部活動に来てくれるかどうかも疑わしい状況だ。

「そのことなら俺に任せろ。それでも俺は鳥ノ宮小の女バスのコー

「チ、なんだからな」

翌日。

昴は朝早くにロードワークに出ていた。

だがいつものコースではない。鳥ノ宮町にある河原沿いの道だ。

しばらく走っていると向こう側から見覚えのある赤髪の女の子が走ってくるのが見えた。

実は昴は風馬から飛鳥が毎日ロードワークでここを通ることを聞いていたのだ。

「あれ、あなたは確か昨日慧心学園の体育館にいた人……ですよね？」

まともに顔をあわせていたわけでもないのに自分のことを覚えていたことに少し嬉しさを感じつつ、昴のほうも自己紹介をする。

「あ、覚えててくれたのか…俺は長谷川昴。慧心学園の女バスのコ
ーチをしてるんだ。」

それで君は空条飛鳥ちゃん、でよかつたんだよね？」

「あ、はい。飛鳥と呼んでくださって構いません。そう、ですか…
…智花達の…」

飛鳥の表情が暗くなる。

「ここで話をするのもなんだし、少し場所を変えようか？」

昴と飛鳥は、公園に来ていた。ロードワークのコースの途中にある場所だ。

「はい、飛鳥。カフェオレでよかったっけ？」

そう言うと昴は自動販売機で買ってきたカフェオレの缶を飛鳥に手渡した。

「あつ、ありがとうございます、長谷川さん。それで、長谷川さんは、私のこと……ご存知なんですよね……？」

私と智花が、前の学校で同級生だったこと……」

昴は無言で頷いた。

「それで……長谷川さんは私のことを……」「心配したさ」

「……え？」

飛鳥は昴の予想外の一言に戸惑った。前の学校で同級生だと知っているならおそらくあのことも知っている。

そのことで自分を糾弾しに来たのだとばかり思っていたからだ。

「雷華たちから聞いたよ。君は理由もなく誰かを傷つけたりする子じゃないって。」

俺も……こうして話しているとそう思えるよ。」

嘘偽りのない昴の言葉。だが飛鳥にとってそれは辛いものだった。

「私は……雷華たちが思っているほど立派な人間じゃありません……
あの時だつて……私のせいで、智花は……」

「何か……あつたのか？」

飛鳥はしばらく考え込むと、昴の問いに答えず、逆に質問してきた。

「長谷川さんは智花のこと、どれくらいご存知ですか？」

「どれくらいって……智花の前の学校のこと？」

そのことなら知っている。

前の学校でバスケをやっていて、一生懸命になりすぎて周囲の反発を受け孤立していったこと。

「そう、ですか……」

わかりました。長谷川さんにはお話してもいいかもしれません。

智花が転校することになった本当の理由と……

私が智花にしてしまったひどいことを……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0304z/>

ロウきゅーぶ! Team of another 1st Capter 鳥ノ宮小女バス編

2011年12月21日23時45分発行